
ヤン・ウェンリー×リリカルなのは

東雲 1 号?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤン・ウェンリー×リリカルなのは

【Nコード】

N8047R

【作者名】

東雲1号？

【あらすじ】

もしヤン・ウェンリーが、リリカルなのはの世界にいたらと妄想した内容です。
ガチ短編です。

というか、内容は期待しない方がいいです。
話は無いに等しいので・・・これ本当です。
作者が書きたいことだけを書いた、欲望の塊です。
正に、書いてみたかったんだよ的な内容です。
見たら見たで多分・・・

こんなの、リリカルなのはじゃない。

こんなの不敗の魔術師ことヤン・ウェンリーじゃないよねと思うかもしれません。

原作のイメージを大切にしたいと思う方は、見ないことをお勧めします

（前書き）

どうも、東雲1号？といえます。

このssは作者の妄想でできています

ヤン・ウェンリーがリリカルなのはにやって来たらと言つ話です。
もう一度書いておきます。

原作のイメージを大切にしたいのなら、即戻ってを選んでください

OK？なんですね・・・分かりました
なら・・・

それではリリカルなのは始まります

一部加筆修正しました

間違いのご指摘ありがとうございます

「はやて君・・・私は今、歴史の研究で忙しいんだけどねえ・・・」
時空管理局の客人という身分の存在ヤン・ウェンリーは、はやての
要請を断っていた。

エルファシル アスターテ イゼルローン攻略 アムリッツァ バ
ーミリオン 回廊の戦いを生き抜いてきた
自由惑星同盟の名将は、今現在こんな時空管理局の時空漂流者の身
分に甘んじている

彼は、回廊の闘いの後

銀河帝国 ローエングラム王朝皇帝 ラインハルト・フォン・ロー
エングラムへの講和への会談に向かう途中で・・・

テロに遭い・・・殺された。

民主主義の象徴として

それを守るために戦った稀代の英雄は
殺された後・・・この世界に気がついたらやってきた。

死んだはずなのに

無傷の状態でやってきてしまったのだ

見えない大きな力が働いたかのように・・・

そしてヤンは、偶然出会ってしまったであろう

八神はやて率いる機動6課に時空漂流者として保護された。

「そんなこと言わんで、大人しく要請にしたがってくださいませんか？」

「ダメ」

「そんなあゝ子供が駄々をこねるのと訳が違いますから」

「はやて君。なんでもかんでも、私に頼ろうとするのは良くないこ
とだといっているじゃないか」

「・・・そうですか・・・なら・・・」

はやては、指を鳴らす
すると

「やっぱりダメだったんだね」

「にはは、仕方ないよ。なんたって・・・」

「ヤンさんだし・・・」

部屋に入ってきたのは、フェイトとなのはだった。

「君たちもか・・・」

ヤンは、この世界に来てからというもの

歴史書に埋もれた生活に専念していた

人生33年・・・

やりたい事はやってきていない。

やりたくも無いことで、結果が出来過ぎていた。

正に、常勝不敗を地で行く存在だった。

自分自身はそれを認めたくないのだが・・・

歴史では

ラインハルトは常勝

ヤンは不敗

そういわれる存在になると

色々厄介だった

やりたい事は出来ずに

来る日も来る日も

戦争の話

歴史書についての研究も

凄く中途半端

一応知識はあるけどね、止まり

酒も飲みたい

酒は人生の友だ

と言い切るほど、酒好きだ

けど、周りが許してくれない

妻のフレデリカ

わが子も同然で戦術の愛弟子

ユリアン・・・

特にその二人が許してくれなかった。

正直、帝国軍の双壁より手ごわい

ヤンにとつての双壁は、正にこの二人だった。

そして・・・今回は・・・

「ヤンさん。手を焼かせんでもらえますう？」

「そうですね・・・私たち・・・心配しているんですよ」

「にやはは・・・それ以上続けると・・・お話でもします？」

1人増えた・・・

2 + 1 = 3

「僕は・・・どこでも、こうなんだなあ」

「ヤンさんも手伝ってください。ウチには穀潰しは、いらへんので」

「それは・・・」

ヤンは、苦笑いしている

流石にここまでいわれたら、動かざるを得ない

なんたつて、自分はここでの立場は

二等兵より低い

生前は、元帥

でもヤンは・・・

生前でも、二等兵といつても過言でもないぐらいの扱いだった。

なんたつて・・・

自分に、知略以外何の取り柄も無いのだから・・・

でも、彼は人望があつた。

それが、彼所以であるところではないか？

カリスマ・・・

何だかんだで憎めない所がある

それが彼のいい所だ

「分かったよ・・・手伝おう。何をすればいいんだい？」

「ティアナに戦術を覚えてくれたら、助かるんですけど」

なのはが真つ先に、話を通してくる

「いやあ・・・私自身、そこまでの戦術論は持ち合わせていないん

だけね」

ヤンは、笑ってそう言い訳する

「ヤンさんは、そうやって自分を卑下しないでください。もっと自信をもって」

フェイトは、ヤンにすぐフォローを入れる

「ありがとう、フェイト君。けど、これは事実なんだよ」

ヤンは、正直半分嘘半分だった

自分よりも、実力がある存在だっていくらでもいる
ただ、自分には運がよかつただけだ

どんな知略でも、運が悪かつただけで成立し得ない
イゼルローン攻略でも

一つ、何かが欠けた時点で負けていたのだ
そついった意味では、自分に自信は持てない

嘘半分の部分だが・・・

自分は、正直嫌だった

これ以上不毛な争いに巻き込まれたくないという自己表現だった
この世界に來た直後

たまたま、オレンジ色髪の少女

ティアナに自分でも似つかわしくない大失態をやらかしたのだ
ポロツと

ティアナに、もう少しこうしたほうがいいんじゃないかな？
という提案をしたら

それが大受けした。

そしてこの事がすぐさま
はやて達の耳に入り

質問タイムだった

ヤンさんって実は何者？と聞かれ始めた

「ヤンさんって、何者なん？」

「いやあ・・・ただの趣味人だけど・・・その中にそついうのも

趣味で・・・少し・・・」

「一応、軍人みたいやったけど・・・階級は確か・・・」

「中尉兼二等兵だよ」

「その意味不明な階級も怪しいんやけどなあ？」

「そうでもないさ。以前の軍でも雑用が主だったから・・・そういう階級だったんだ」

ヤンにとって中尉というのは思い出深い

自分の人生にとって大きな分岐点となった出来事

エルファシル・・・

あの出来事を起こしてしまった時の階級なのだ。

正直、元帥だったのは口が裂けてもいえない

そんなことが分かればもう・・・

色々面倒なことになる

自分を守る為に・・・手段は問わなかった

「そうかなあゝウチからすれば、もっと大物な気がするけど」

「いやあゝそれははやて君が、そう思っているだけさ・・・」

そう言つて

彼は誤魔化した

ホントそんな感じで今までやってきた

「ティアナ君に言つといてももらえないかな・・・私が教えるべきこととは何もないと」

「そう言われても・・・ティアナは・・・」

「弟子になりたがっているみたいだよ」

フェイトが、そう付け加える

「私に習うよりも・・・なのは君に習ったほうが、いいと思うんだけどね」

「そんなこと無いですよ。私が教えられるのはどちらかというと、戦術面のほうですから・・・」

「戦術的勝利は、戦略的勝利を収めるに重要な要素だよ。いくら戦

略的に勝っていても、戦術をおろそかにすると勝てないからね・・・
そういう意味では、なのは君の訓練が重要だということだよ」

「そう言って、いつまで逃れられると思ったら大間違いですよ」

フェイトが、ニコリと笑って

ヤンの首筋に死神の鎌を当ててきた・・・

気がする

「君たちは、有能だよ。私なんかよりは特にね」

そこまでヤンは言う

よっころしょと立ち上がり

自室から出て行く

「どこに行かれはれます？」

「ヴァイス君達の所で、雑務をしてくることにするよ」

後頭部をボリボリと掻きながら

ヤンは、そそくさとその場を立ち去って

いつになったら

自分に安息な日々が訪れるのかと思いながら

彼は魔術師の適性は無い
使えるデバイスも存在しない
仮にあつたら

愛すべき妻 フレデリカ

わが子同然の愛弟子 ユリアン

自分が所属していた同盟軍艦隊の旗艦 ヒューベリオン

不正規艦隊の総旗艦 幸運の船 ユリシーズ

のどれかを名付けていただろう

だが、彼にはそんなの必要が無い

なんとって知略がある

その舌から紡ぎだされる言葉は正に魔法だ

首から下は使い物にはならないが

それを補って余りあるモノがそこにある。

後に、彼は管理局のトップに立つことになる

隠しても隠し切れないものがそこにある

ただ目の前のモノだけじゃなく

遙か先の物が見える存在

ミッドチルダに管理局が統治する専制主義ではなく

統治されているはずの民衆が自分で未来を決めていく制度

民主主義の英雄として

その名を知られることになる

でもそこでも・・・彼は

やれやれと口癖に

年金生活に入りたいと

ぼやいていたというが・・・

そんなこんなで・・・

銀河の歴史が・・・また1ページ・・・

ちよつとしたおまけ

「ヤンさん。このままでは艦隊が壊滅します」

「もう少しだ・・・もう少しで・・・」

「ヤンさんッ!!」

「クロノ君。全艦隊に戦術コンピューターC5を開くように指示してくれないか」

「ハッ!! 分かりました」

そして・・・指示が終わり

「ヤンさん。もう少し、ビシッとできないんですか?」

「うゝん・・・無理かな・・・それより」

ヤンは、艦隊に備え付けられている机の上に胡坐を掻いて指示をしている

最初、みんなは認めなかったが

徐々に認めていく

数回の激戦を潜り抜けていく内に

それは、周知のものとなっていた

「今回も・・・生きて帰れるでしょうか?」

「自分の考えた作戦が・・・うまくいくように祈るだけさ」

「ダメだったら?」

「頭を掻いて誤魔化すさ」

命のやり取りでもこの態度

だけどころが

彼の魅力だった

そしてこの戦いに勝利する。

それは、不敗の魔術師ことヤン・ウェンリーが
リリカルなのはの世界でも健在だということを
証明するのだ。

ヤンが、リリカルなのはの世界で言いそうな台詞
あくまで、原作の台詞のオマージュです。

「いいかいティアナ。無理をするのは自分のためにならないよ」

「なんで・・・そう思うんですか？」

「いやあく私の趣味じゃないからかな？・・・」

「なのは君。君はティアナに暴力を振るった・・・そうだね？」

「はい・・・私は・・・あの時」

「言葉で伝えられないことも確かにある。けど、なのは君。君はそ
れを使い尽くしたのかい？」

「おかしい話だね。どんな人間でも不老不死はありえないと信じる
のに・・・管理局の権力は永遠に不滅と思ひ込んでいる存在がいる。
正直、馬鹿馬鹿しい限りだよ」

「管理局の連中は、管理局なしで生きられないというが、そうは思
わないね。人間はそんなのが無くても生きられるし、管理局だって
人がいてからこそ成り立つんだ・・・なぜそのことが分からないの
かな？」

「私が今考えているのは、ジェイルの科学者としてのプライドを利用して、いかに勝つか・・・それを考えているに過ぎない。実はもっと君達、機動六課の面々には、楽をしてもらいたいと思っっているのだが・・・今回これが、最大限楽な道なのだから、仕方がない」

時空管理局地上本部が戦闘機人に襲撃される前に

地上本部の警備体制を見て一言

「いくら用心しても、ダメなときはダメさ」

「ヤンさん。そんな不安をあおるようなことを言っちゃダメなの」

「私なら、落とし穴の上に金貨でも置いておくさ。そっちのほうがかえって効率がいいからね」

「どういうこと？」

「いやあくただの独り言だよ」

管理局上層部の連中の前で

「人間の行為の中で最も何が卑劣で恥知らずかお分かりですか？」

「キ・・・君・・・何なんだね？たしか・・・」

「失礼。私の名前はヤン・ウェンリーといいます。それでは話を続けましょうか」

「そんなこと聞いて・・・」

「失礼だといいましたか？」

「く・・・」

ヤンの有無を言わさぬ態度に、全員が絶句する。

「分かって頂けたのなら話を続けますが、人間の行為の中で最も何が卑劣で恥知らずか。それは権力を持った人間、権力に媚を売る人間が、安全なところに隠れて戦争を賛美し、年端のいかない子供達には洗脳じみた忠誠心や犠牲精神を強制し戦場に送り出すことだと思いますが？本当に・・・これは私の知りうる限り・・・もっとも恥知らずで愚かなことだと思いますが？」

「キ・・・キサマぁ・・・」

「全世界を管理するという下らない幻想を云々する前に、まずその種の悪質な寄生虫を駆除することから始めるべきではありませんか？」

フェイトが、ジェイル・スカリエッティとの関係が運命と評したとき
「フェイト君。宿命とかそういうものはどこにも無いよ。どんな状況でも本人が選択したことに変わりはないよ」

機動6課の司令官を任されたときに言いそうな台詞

「君達がいってくれないと困る。私は物覚えが悪いし、メカも・・・何もかも弱い。だからこそ、有能な君達が必要なんだ」

「はやて君。判断をする上で大事なことは何だと思う？」

「それは、情報とちやいます？」

「その通りといえばその通りかな。いいかい？はやて君。正しい判断は正しい情報と正しい分析の上で成り立つんだ。だから君には、常にそれを心がけてほしいね」

「お金のために人を殺すのは悪いことじゃないと思うんだ。信念とやらで殺されるより、よつぽどね・・・」

「なぜですか？その為に殺された人は、浮かばれないと思います」
フェイトが、涙ながらにそう言う

「金銭は、万人に通じる価値がある。けど信念はその当人にしか通じない。だからかな・・・」

「いいかい？ティアナ。この管理局そのものは軍隊に等しい・・・軍隊はね・・・道具なんだ。それも無いほうがいい道具だ。このことを覚えていておいてなるべく、無害な道具になれるといいね」

「はやて君。何で戦争が愚かなことだと思っかわかるかい？」

「人が、無意味に死んでいくからですか？」

「そう・・・いい人間。立派な人間が無意味に殺されていく。それが戦争なんだ。私はね・・・そんな人間を数多く見てきた・・・たくさん・・・たくさんね・・・」

彼の根底に根付いていると言っても過言じゃない一言

「私は最悪の民主主義でも最良の専制政治に勝っている。だからこそかな・・・だから、私は管理局のことが、好きになれないんじゃないかな・・・」

自己紹介 正に作者の妄想の塊です。

ヤン・ウェンリー 漢字では 楊文理

年齢 33歳

身長 172センチ
体重 65キロ

血液型 B型
そうだった気がします・・・

所属

元自由惑星同盟軍 元帥
元 不正規艦隊 革命予備軍最高司令官

現在 時空管理局 古代遺物管理部 機動六課 時空漂流保護者

現ポジション

戦略・戦術アドバイザー　機動六課副司令　無限書庫歴史部門司書
長　などなど

とはやてからは、これだけのポジションを与えられている。
本人は、過大評価にも程があるとして嫌がつている。

魔法は全く使えない

魔導師としての能力皆無

よって、デバイスも当然の如く有りません
いくら、不敗の魔術師といわれても・・・ねえ？

好きな事

歴史の研究　彼を語る上での永遠のテーマ。年金生活と一緒に目
標としながらも永遠に叶わない事。その・・・知識はあるんだけど
ね、止まり程度。けどそれでも、そこら辺に歴史家が舌を巻くほど
の知識を有しているのだが・・・

酒　夜な夜な町に出ては大量に酒を買い付けていて、なのは達か
らは、アル中一步手前と言われている。酒の保管場所（隠し場所）
に苦労しているというのは、読者とヤンだけの秘密だ

紅茶を飲むこと 特にブランデーがたっぷり入った紅茶が好物。

三次元チェス なのはの世界にはありません 実力は・・・弱い
ほうです。因みにチェスは・・・不敗の魔術師にふさわしくなく・・・
・やっぱり弱い

年金生活 これも願望 永遠に叶わないと思うが・・・自分の才能が思いのほか邪魔をする・・・

ポーカー

これは作者の妄想。趣味ではなく得意な事。常に相手の考えて先を見通して勝利し、魔術師の称号を欲しいままにしている。おかげでギャンブル場からは出入り禁止を食らっている。正に、才能の無駄遣い

本人は、ギャンブルは嫌っている。

けど、その腕を買われることは多い

嫌いなこと・もしくは存在

俗物な権力者

ヨブ・トリユーニヒトみたいな奴

付け加えておくが、ティード・ランスターの上司みたいな奴も大嫌いに違いない

常日頃から偉そうな事言っているくせに、肝心なときには安全な場所
所に隠れて奴など特に

この国にもそういう存在は、ゴロゴロ居ませんか？
君の傍にだって、ほら・・・

軍そのもの

権力・政治

社会が機能する為には無きやいけないものだとは自覚しているが・
・下水処理場のようなものとして嫌っている。

コーヒー 飲めないことはないが、こんなの泥水じゃないかと言
い嫌っている

演説・スピーチ

通称2秒 原作の艦隊司令官着任の挨拶でさえ「司令官のヤン・
ウェンリーです。よろしく願います」で済ますほど短い
管理局の1個艦隊を預かったときでも確実に「司令官のヤン・ウェ
ンリーです。よろしく願います」で済ませてクロノ達から呆れ
られるに違いない。

必要以上の社交辞令

特に偉いさんが集まる会場は、嫌悪感を示している。ホテルアグ
スタのオーデイション会場にさえ、行くのを躊躇いそうな気がする。

演技

これは作者の妄想。政戦両略での駆け引きは出来ても、日常での
駆け引きはめっぼう弱い。特になのは達相手は特に・・・本人から
すれば努力しているが、知略以外はからつきしなんだと自覚させ
られると本人は言う。

性格 一部オリジナルの要素も入っています

温和で大らか。安定した人格者ではあるが・・・人格者？と疑いたくなる位、切れるときはキレル。

嫌いな相手には、温和な表情で辛辣な台詞を吐く。

そして自室に籠り、歴史書などに手酷く当たった拳句・・・後に、テープなどで補修するという行動も目立つ。

こっちの世界では、どこと無く気ままで誰にも縛られたくないという願望が強く、自分の本来の能力を隠そうとする傾向が強い
いい加減、歴史家になって安定した生活を送りたいようだ。

卓越した知略家でもあるのだが・・・もったいない話でもある
長所以上に意外と欠点が多いんじゃないか？

というキャラでもある。

でも戦場などでは、正に最強の名は彼の為にありという大活躍をするのは間違いない。

ただし、戦略・戦術家としてあるが・・・

直接戦闘は、キャラにも負けるんじゃないかと言いたくなる位弱い。

（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。

「しかし、無謀なことを考え付いたよな。作者も」

心の声ですか・・・この作品の酷評ですか？

「とりあえず、作者をイジメに来た」

あの・・・それはそれで・・・

「しかしストーリーは・・・無いに等しいな」

そうですね・・・作者、頭脳戦描くの苦手ですからね

「ヤン・ウェンリーというキャラクターは、その集合体だからな」
連載は到底できませんね

「作者のことだから・・・」

確実に投げ出しますね

「それと・・・作者のことだから」

別の銀英伝のキャラを出したりしているのは請け合いで・・・

シェーンコップなんか出したあかつきには・・・

「いろんな意味で無双されそうだな」

ラインハルトだったら・・・

「なんか・・・なのはたちが可哀想な立場に追いやられそう」

大人しくしてそんな姿が想像できないですからね

オーベルシュタインだったら・・・意外と面白そうだったりするかも・・・

「絶対、機動6課と対立するだろうな。あの人に正義も優しさもないからな。ただあるのは」

確かに・・・あるとすれば非の打ち所がない正論ですから・・・

「銀英伝は作ってて、難しくないか？」

難しい・・・ホント難しい

改めて、そう実感しました。

「読むのは一瞬」

作るのも一瞬だったらどんなに嬉しい事やら

脳内の妄想を一瞬で文書化できる機械が欲しい。

「そして、それができたらできたらで、また別の愚痴をこぼすだろうな」

人の揚げ足を取らないでください

「そんな感じで・・・」

ええ・・・読者の方々には、少しでも面白いと思えば幸いです。

それでは別の作品でお会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8047r/>

ヤン・ウェンリー×リリカルなのは

2011年5月16日21時05分発行